

島暗くひとにぎりほど夜長の灯
露の世の些事と云へども一大事
灯の海の高速度高架月今宵
外灯をはなれて月の蛾とぞなる
糸瓜忌やいまの世も弟子仲たがひ
子規居士の恋やいかにと祀りけり
天高し噴水白き炎のび
虻刺してひと騒動や栗拾ふ
時雨忌や家事かへりみぬ一作者
時雨忌やわざわざ伊賀にゆかずとも
うたかたの恋もかくやと帰り咲く
鴨の棹夕日を刎ねて曲りけり
こゝの茶屋吊られし鴨を見る日なし

浜寒し口笛に犬ふりむかず
糶台にたゝら踏む人息白し
枯蔓の拋物線のゆらゆらす
枯蔓のもつれを解けば折れて落つ
下敷に焼けざる反古や菊を焚く
菊焚きし灰のさほどに嵩なさず
南蛮の衣ぞ黒き屏風かな
道よりも低き灯の窓紙を漉く
フレームの鉄管湯気を洩らしけり
フレームの小さき花の匂ひけり
拾ひたる恋といふべし日記買ふ

二〇一八年六月二十六日